

都立両国高 vivid

横浜サイエンスフロンティア高 RINRIN

田園調布学園高等部 なでしこ〜ず

都立国際高 ひまわり

都立千早高 sourire

都立千早高 gleams



第4回 SAGE JAPAN CUP

6チーム参加 田園調布学園が優勝

高校生が社会貢献事業のプランを提案する「第4回 SAGE JAPAN CUP」(毎日新聞社主催)が、このほど東京都八王子市の創価大学で開かれた。次期学習指導要領で育成すべき能力として掲げられている思考力や判断力、表現力などを具現化することができるコンテストだ。大会運営には大学生が主体的に関わり、教育関係者や企業関係者がサポートしており、発表の中身も充実している。今年の模様を紹介しよう。(中根正義)

SAGE (Students for the Advancement of Global Entrepreneurship) は、若者たちが大学生や企業のサポートを受けながら社会貢献や起業に焦点を当てた事業を立案・実践することによって、これからの社会に求められる問題解決能力や提案力、チャレンジ精神、イノベーション能力の育成を目指している。2002年にアメリカ・カリフォルニア州立大のカーティス・ディバーク教授によって「SAGE Global」として設立された国際的組織。現在、中国、韓国、ロシアなど約30カ国の高校生たちが活動し、毎年夏に国際大会が開催されている。

日本では2013年に「SAGE JAPAN」推進委員会ができ、現在、創価大教育学部の宮崎猛教授が中心になって活動をサポート。同委員会は、高校生、大学生ともに個人やチームとしての目標を設定し、終了後の振り返りを行い、「学び」を重視している。SAGEとは異なる特徴となっている。

3月20日に行われた今年の発表会は、昨年4月から準備が進められてきた。同大会の学生たちによる委員会メンバーが高校生のチームや学生サポートを募り、参加チームが決まってきた。発表内容の審査員は、今年も都立千早高から計6チーム。高校関係者や大学サポート、発表メンバーの家族など約100人が来場し、約半年をかけて行われたプロジェクトのプレゼンテーションに耳を傾けた。

発表内容は、けがをした高校生の通学支援に在校生で少しずつ積み立てたお金を使い、提携した会社のタクシーを活用するというものや、フェアトレード商品を扱う企業や横浜市の高校から計6チーム。高校関係者や大学サポート、発表メンバーの家族など約100人が来場し、約半年をかけて行われたプロジェクトのプレゼンテーションに耳を傾けた。

都立両国高 vivid
けがをした生徒の通学支援サービス

横浜サイエンスフロンティア高 RINRIN
科学実験教室開催によるフードロス問題の啓蒙

田園調布学園高等部 なでしこ〜ず
売れ残り品のバナナを使ったフードロス削減活動

都立国際高 ひまわり
映像を通じたフィリピンの子供たちの教育支援

都立千早高 sourire
フェアトレード商品の販売による発展途上国の児童労働問題の啓蒙

都立千早高 gleams
修学旅行を通じた過疎化地域との交流

総合的な学力 育む機会

SAGEでの活動は、チームで課題に取り組むことが求められている。学んだ知識を活用するための応用力に加え、グループワークを遂行するためのコミュニケーション力も鍛えられる。自分の意見を他のメンバーに理解してもらうという合意形成のために働かせる能力は、知識だけでなく、コミュニケーション能力も求められる非常に重要な能力である。

キャリア意識形成

的に行き、総合的な学力を育む機会になる。キャリア意識の形成にも役立つ。主体的に社会の問題に向き合い解決法を探ったり、普段学んでいることとの関連性を考えることで、自分の興味や関心に気づき、未来の生き方や仕事を考える良いきっかけになる。さらに、高校生をサポートする学生にとっても成長

興味や関心 発見

長場になった。学生たちを指導する宮崎教授によれば、大学生が高校生にとってのロールモデルであるよう努力することがその理由だ。

宮崎教授は「企業などの接点があることも見逃せない」と指摘する。実際に企業の担当者からアドバイスを受ける機会があることは大学生ばかりか、高校生にとっても社会を学ぶ大きな

な機会になる。企業にとっても若者育成や若者のニーズを探る貴重な機会だ。実際、「SAGE JAPAN」の活動をする高校生や大学生が調査をしたこともあったという。

SAGEでは、社会貢献と起業に焦点を当てた活動をしている。しかし、起業や起業家を育てることに力点を置いているわけではない。その過程を通して身に付けることができる問題解決能力や社会貢献力、提案力、創造力、チャレンジ精神、イノベーション能力などの育成を目標としている。

これは次期学習指導要領で掲げられた「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「主体的に学習に取り組む態度」という学力の3要素、中でも、これまでの学校教育では難しかった「思考力・判断力・表現力」を具体的に学習に取り組み態度を具現化している。また、「SAGE JAPAN」は国際的組織の一翼を担っており、グローバル化が進む中で異文化・国際理解にもつながっている。それだけに、活動の裾野が広がっていく。今までの以上に注目されるようになった。

身近な貢献 高校生が提案



半年以上かけて準備してきたプランを発表する参加者

と高校生をつなぐ場を提供し、開発途上国の児童労働問題に関心をもちたい」と意気込みを語った。また、同校の西村弘子校長は「メンバー各自が意見を出し合いながら、身近なテーマを身の丈にあった形で取り組んできた。生徒をサポートしてくれた大学生が、折に触れてアドバイスしてくれたことも生徒たちのモチベーションアップにつながったようだ」と話していた。

3月20日に行われた今年の発表会は、昨年4月から準備が進められてきた。同大会の学生たちによる委員会メンバーが高校生のチームや学生サポートを募り、参加チームが決まってきた。発表内容の審査員は、今年も都立千早高から計6チーム。高校関係者や大学サポート、発表メンバーの家族など約100人が来場し、約半年をかけて行われたプロジェクトのプレゼンテーションに耳を傾けた。

今回の大会について、審査委員長を務めた都立大田校台高校の酒寄誠校長は「発表のレベルが年々上がってきており、出場チームの差はほとんどなかった。活動には時間とエネルギーが必要だが、プロセスが貴重な経験となるので、これからも、こういう機会に参加しチャレンジしてほしい」と講評した。

3月まで「SAGE JAPAN」推進委員会一代表を務めた高橋裕奈さん(22)は「12人の学生サポートチームが、3人ずつに分かれ、各チームをサポートしてきた。高校生たちや企業関係の方々も接する中で、私たちが成長したことが実感できた。将来は、世界大会で優勝できるようにチームが日本から出てほしい」と振り返った。

指導にあたった宮崎教授によると、参加した高校生たちにはサポートしてくれる大学生というキャリアモデルをプロジェクトを通して身近に知ることができ、大学進学など進路へのモチベーションにもつながっているという。

一方、活動に携わった大学生たちは確実に進路を決めており、同大会の研究室と比較しても特筆されるものという。学生たちは高校生にアドバイスしたり、企業関係者と連絡調整を図るなどしており、これがコミュニケーション力のアップにつながったとみられている。また、学業やサークル活動、アルバイトなどがある中で、タイムマネジメントがきつんとできるようになったことも、そうした結果につながっている。

とはいえ、コンテストについては課題もある。大学生が高校生をサポートするという体制や大会運営上の制約から、出場校数は、7校に限られるため、「裾野を広げるための工夫が必要だ」と宮崎教授は話している。